

となった。Gさんのサツマイモを選んだ時のGさんの感動を共に感じ、もっとGさんの思っていることを沢山話してもらいたいなあ、という具合に、スタッフからけしかけるのではなく、認知症の人の行動からスタッフの関わりが触発されると本物ではないかという意見も聞かれた。

事例4. H氏

H氏の撮影場面は、朝のリビング、お茶会、スーパーでの買い物、調理、夕食、トイレへの移動、口腔ケアの7場面であった。

1) 認知症高齢者の感情反応

30分間で45の行動に分割された。Positive反応72.7%、Negative9.1%、Neutral3.4%、Others14.8%で、Positive反応の占める割合が高かった。感情反応のコーディングについては、2種類がコーディングされている行動が8コマみられた。その中でも「意欲」と「考える」が5コマで認められた。Hさんは、表情の変化が少なく、感情を的確に読み取ることが困難な対象者ではあるが、何かをしている場面でも自分の世界に入って考えているのか、意欲を持って行動しているのか、もしくは混在しているのか、第三者からは判断が難しいことが考えられた。

2) 関わりの意図

<注意を向ける><尊敬の気持ち><一緒に楽しむ><思い出してほしい><昔の誇らしげな姿をみたい><雰囲気を感じてほしい><混乱させない><力の発揮><地域との交流><楽しさ><好みを知る><昔をイメージする><どんな意見聴きたい><分かり易く伝える><挑戦してみる><理解度をみる><行動を確認する><意欲的><イメージし易く><昔の生活を尊重><感謝><耳が遠いことへの配慮><ユーモア><美味しく食べる><誉める><拒否されないように><本人のペースで><協力><モデリング><選択><安心>の31のキーワード、キーコンセプトが抽出された。以下に具体的な語りの内容を一部示す。

<注意を向ける>は、「朝のリビングでHさんは、いつも朝はテーブルに頭をつけて常にうつむいて状態で過ごしている。そこで、注意をHさんの世界から外に向けようとして声かけをした。」→ 反応なし(Others-15)

<尊敬の気持ち><一緒に楽しむ><思い出してほしい><昔の誇らしげな姿をみたい>は、「お茶会の席で、側に居たスタッフは、昔お茶を嗜んだことがあるという尊敬の気持ち、一緒にお茶を楽しみたい、作法を思い出してほしい、Hさんの誇らしげな姿を見たいと、茶道のお話かけをした。」→ 快く会話(Positive-2)

<地域との交流><楽しさ><好みを知る>は、「買い物に行くことがまず地域との交流を目的としている。スーパーでは、品物を選んでもらい、選ぶ楽しさ、またHさんの好みを知るという意図を持っています。」→ 意欲的に選ぶ(Positive-3)

<拒否されないように><本人のペースで>は、「口腔ケア(就寝前の歯磨き)の際、押し付けになると、時々やることに拒否がみられるので、本人のペースで一緒に

やるとスムーズに行ってくれる。」→ 入れ歯を自分ではずす(Positive-5)

2. スタッフの関わりの意図のカテゴリー化

4 事例からスタッフの関わりの意図が合計 115 項目のキーワード、キーコンセプトとして抽出された。表現には多少違いはあっても、関わりの意図として捉えてみると、いくつかのまとまりに分類でき、重要だと意識されているスタッフの「動議づけ」を確認することができた。大雑把なカテゴリーとしては、身体面、精神面(特にBPSD)、安全面などに配慮した基本的介護、ふれあい、共感、なじみの関係、社会との関係に配慮した対人コミュニケーション、そしてその人の理解、自尊心、力の発揮、ユーモアなどの入居者のQOL向上を目指したものという3つに分類することが示された。

カテゴリー化する際の基本的視点として、認知症高齢者に関わる者の意図として、3つのカテゴリーを考えた。【生命維持・安全に配慮した関わり】【人と社会との関係性を重視した関わり】【自己実現のための関わり】である(表5-4)。

この考えはマズローの自己実現の考え方を応用したものであるが、認知症高齢者に対する関わる者の意識を常に高める努力をしていくことの大切さを基盤においている。

カテゴリー化の結果を検証するため、認知症高齢者への経験年数8年、6年のスタッフ2名で一致を測定した。(表5-4参照) 一致度は平均87.1%であり、このカテゴリーの有効性を示すものである。

以下、各カテゴリーについて説明する。

1) 【生命維持・安全に配慮した関わり】・・・認知症により、具合が悪くても気づかない、危険を察知できないなどのための部分を支援するための意図である。

①身体面への配慮は、難聴のため分かり易く伝える、目を疲れさせない、運動不足解消、快く眠られるように、バランスよく食べているか、排便、排尿のサインを見分ける、水分の摂り具合、今日の調子(顔色はどうか)、車椅子からの立ち上がりなどのキーワード、キーコンセプトである。②精神面(特にBPSD)への配慮は、できるできない、理解できるできないのみ極め、注意を外向きにする、拒否されないように、昼夜逆転しないように、不機嫌な状態にならない様等である。③安全面への配慮は、ノドにつまらせないように、転倒、骨折予防、野菜の切り方などである。

以上、3つのキーワード、キーコンセプトからなり、生命維持のため最低限必要な関わりで、安全確保、身体介護を中心として行われ、第三者が観察して判る支援である。また、健康保持・予防的なものも含むこととする。

2) 【人と社会との関係性を重視した関わり】・・・本人は他者(人、地域)と何らかの社会関係で結ばれているので、その関係性を支援するための意図である。

①なじみの人間関係を大切にし、本人と行動を共にするための意図、②本人ペース(心の動きや会話)にあわせるための意図、③コミュニケーションをうまくするための意図、④蔑視や排除をしない、モデリング(やって見せる)、具体的にイメージし易いように等の混乱させない

いたための意図、⑤買い物・地域の子供との交流等の社会との交流を積極的に図るための意図、⑥共感するための意図、⑦環境的に安心感をもってもらうための意図、⑧気分をよくするための意図がある。

以上、8つのキーワード、キーコンセプトからなり、人間関係を重視し、居心地の良さを求めたものである。

3)【自己実現のための関わり】・・・人はいつまでも発達する可能性を秘めた存在であることを貫く関わりを支援するための意図である。

①どうしたいのか等の本人の生き方(全人格)の受容と理解、本人の価値観を大切にするための意図、②誉める、持ち上げる等の自尊心を高めて、自信を持ってもらうための意図、③好きな物を選んだり、本人の今を大切にしたい等の本人の生活感を大切にするための意図、④力の発揮等、絶えずプラスの働きかけにより、可能性を引き出すための意図、⑤笑顔をみたい、楽しく等の本人の満足感、幸福感、達成感を最大限に満たすための意図、⑥記憶をたぐり寄せたり等、過去を大切にしたい等の意図、⑦何かに挑戦、歌う等の創造性をかきたてるような意図、⑧ユーモアを持って、一緒に楽しむための意図、⑨感謝の気持ちを伝える、生き生き発言等の自己実現してもらうための意図、⑩やる気を出す、興味・関心を示す等の本人の意欲を大切にする意図、⑪押し付けない、主役になる等の本人の考えや行動を自由にしてもらう意図、⑫本人の考えを推し量る、いろんな情報を得る、一歩はなれて関わる、本人の行動様式やパターンの観察、肩肘はらず自然体で関わるなどの客観的に自然体でみるための意図

以上、12のキーワード、キーコンセプトからなり、これは、認知症の人が求める支援の視点であり、生涯発達の視点でもある。基本的な生活支援から自身にとっての豊かさをも求めたものである。

D. 考察

1) 入居者の感情反応について

入居者の感情反応の結果は表5-5に示した。全体的傾向として、平均でPositive反応72.0%、Negative反応9.7%、Neutral反応7.1%、Others11.2%という結果であった。どの事例においてもPositiveな感情反応の占める比率が高かった。

入居者のPositive反応が7割に認められ、Negative反応が1割に満たなかったことから、調査事業所のグループホームやユニットケアで生活している認知症高齢者は一日を通じて、介護スタッフの関わりにより、快感情が多く占められていることが理解された。先行研究などでは、グループホームやユニットケアは「生き生きと」「意欲を持って」「心穏やかに」「楽しく」等の代名詞に表現されているが、まさしくそのことが証明され、Positiveに過ごしていることが示された。

また、認知症高齢者の感情表出は介護スタッフの関わりによって仕草や表情などが変化していることが観察されたことから、介護スタッフの支援行為と深く結びついていることが示され

た。Kidwood(1997)は、“認知症の人が経験する不快な感情のほとんどは彼らの障害からくるものではなく、周囲の否定的な態度や介護行為によるものである”と介護者と認知症の人の関係を表わしている。本研究から、認知症高齢者に対する支援行為を決定づける介護スタッフの意識の重要性が理解された。

2) スタッフの関わりの意図

14名の介護スタッフのインタビューから多数の意図が抽出された。また、一つの関わり行動についても複数の意図の存在も確認することができた。そして、表現に多少の違いはあっても関わりの意図として捉えてみると、いくつかのまとまりに分類することができ、介護スタッフの関わりの動議付けを確認することができた。その指標として、マズローの欲求段階モデルを応用し、身体状況や安全性に配慮した最低限必要な【安全性・生命維持のための関わり】、馴染みの関係や共感、安心感を持ってもらう等の【人、社会との関係性を重視した関わり】、可能性、創造性、自尊心、価値観等を大切に【自己実現のための関わり】と3つのカテゴリーに分類し、小項目にはそれぞれにインタビューから抽出されたキーワード、キーコンセプトを当てはめていくことが可能となった。

この3つのカテゴリーは、図5-1に示す関係性があると思われる。本研究プロジェクトの目的は、認知症高齢者ケアの標準化であるが、本研究の成果として、安全性・生命維持のための関わりの分析及び強化が認知症ケアの最低ラインの維持であり、関係性を重視、自己実現のための関わりは、質の高いケアへの志向として普及・浸透すべきであると考えられる。

3) BPSDと関わる意図との関係

アルツハイマー型認知症のように自ら認知症という症状を体験しながら認知症の症状を進行させていった高齢者の場合、いわゆるBPSDを起こすことが往々にしてある。上述の通り、認知症に至る間の心理的ストレスがその主な要因と考えられていることは多数の報告からも明らかである。すなわち、心理的ケアを重視するという基本方針は的を射たものである。

認知症高齢者に対して大きなストレスとなるのは、ある体験そのものを忘れてしまい、状況判断もできなくなるため、常に不安で傷つきやすく、混乱しやすい精神の状態におかれているからである。ここで重要なことは、周囲の人にとっては異常な行動であっても、認知症高齢者自身にとっては、必ずその人なりの合理的な理由が存在することである。そのため、認知症高齢者に関わる場合は、本人の特徴をよく知って、行動の意味を理解しようとする関わりが重要になってくる。このことはスタッフ・インタビュー及びカンファレンスにより確認されている。

<事例3 G氏の場合>

何をするにも一つの行為を始めてしまうと、延々とその行為がとまらないGさん。不安感も強く一つ一つ介護者の確認をとってからでないと次の行動に移るのが難しい方である反面、誉められると良い気分となることを介護スタッフは理解している。そこで、朝の洗面の場面では、そのGさんに対し、介護スタッフは洗面の場面で、2つの意図を持って関わっていた。1つは、一度顔を洗いはじめるとお湯を出しっぱなしにしながら、長い時間をかけてしまうことを理解していたことから、朝食でご飯を盛る直前に洗面の声かけをし、タイミングをみて朝食支度へ

気持ちが向くように関わっていた。認知症特有の見当識障害に伴う混乱を予防するという根拠が確認された。また、2つめは、同時にくしを渡すときちゃんと自分で整えてくれたのに対し「めんこい」と介護者が誉めることで少しでも豊かな気持ちになって一日を気持ちよく過ごしてもらいたいという自己実現への志向を目指した意図も確認された。この2つの意図により、入居者の行動を否定しないことで、入居者のペースに何気なく合わせ、彼らの生活を再現していた。そして、Gさんの心地よさの保障までも踏み込んでいる。その成果は、仕草や表情から「満足」のPositive反応として評価されている。

<事例2 F氏の場合>

夜中、何度も起きてくるFさんに対する介護スタッフの対応は、その場かぎりの声かけで、感情反応は「不安」のNegative反応であった。これに対し、スタッフ間のカンファレンスでは、主として観察視点について話し合った。その観察視点をまとめると、①身体的な健康状態の把握(「寝ていなかったかどうか、泌尿器の疾患はないのか、食事は十分だったのか」等)、訴えられない痛みの有無(「ぶついたりして、手足が痛いところはないのか」等)、生活歴・習慣の背景(「夜はどんな生活習慣があったのか、何か不安になる出来事があったのか」等)、心理的社会的要因(「家族と会う機会が少なかったりして寂しいのでは」等)、その他、入居者やスタッフとトラブルはなかったかが話し合われた。その結果、Hさんから「一緒に寝ないのか」との言葉が聞かれることが多いことから、寂しいのではないかと推論し、声かけだけで安心感を提供するのではなく、側で一緒に夜を過ごしてみよう、という結論になった。ここでは、夜起きてくるという特徴をスタッフが理解するための総合的な視点が浮かび上がってきている。

本研究では、スタッフ・カンファレンスによって、観察視点を共有化し、それに基づいた共通要因を模索して関わりの方針を明確化した。それが事例2であり、そのプロセスが定着することにより、BPSDを予防する関わりが自然とスタッフの支援行為として行われることが可能と理解された。

4) 関わりの意図の意味づけと課題

前述したが、認知症ケアに際して重要なことは、本人の言動を否定しないことである。このことは、スタッフと入居者、入居者同士、入居者と地域社会などの関係を途絶えさせないために守らなければならない最低限のケア手法であり、このことが認知症高齢者の残存能力の開発と活用に大いに寄与するものであると思われる。しかし、同時にこうしたことは、介護スタッフに対して、時には入居者の言動を巧みに正当化、あるいは現実社会の「常識」に誘導するスタッフの技量が重要であることを示している。

事例3の場合、午後のリビングで、自分の洗濯物がなくなったといい、他の入居者が盗ったのではないかと入居者間のトラブルになりそうな場面で、入所者間の疑心暗鬼を取り除き、関係修復や維持を意図として、無くなったのはスタッフのせいであり、申し訳なかったと謝る行為が認められた。結果、無くなったと自覚している入居者の不安が取り除かれ、周りの入居者にとっても自信喪失が防げられたことで、「親しみ」のPositive反応となっていた。この事例

の場合、グループホームで形成される「関係性」の維持が介護スタッフに課せられた課題となる。この場合、洗濯物がなくなったとする入居者への関わりと、他の入居者の「関係」、さらに介護スタッフとの「関係」を壊さないことが重要であり、この支援行為自体は積極的な関わりとなりうると考えられる。

また、事例2、事例3、事例4では共に料理の際に包丁を使っていた場面があった。料理を支援するということが、まず「積極的」関わりとなる。当然刃物を使うのであるから、「安全」の確保は重要な観察視点であるが、ここではむしろ、「ベテランの主婦」の料理の腕前にまかせ、食材や調理法についての「会話」をスタッフは試みている。この場合、このキッチンでの「会話」はちょっとした「昔の自分に戻る、生活感を取り戻す」であり、積極的な関わりとして位置づけられる。

さらに、事例1ではスーパーでEさんが買い物中に菓子コーナーからあんぱんを取り、その場で即、食べようようとしている場面があった。認知症高齢者の言動を否定しないケア原則を忠実に守るということは、時としてスタッフに大きな試練を与えることになる。この事例の場合、表面的には社会的規範を犯すという行為を行ってしまう入居者に対して、認知症高齢者を悪者にしない手立てを講じることが介護者の課題となる。この事例では、介護者は「レジまで持っていきましょう」と声かけをし、難局を逃れている。いわば認知症ケアの教科書を忠実に守ったのである。この事例は認知症高齢者ケアに対して、重要な示唆を与えているように思われる。抑制が効かない入居者と一緒に買い物に出かける場合、お店の協力が不可欠であるといえる。自衛策として、大好きなアメなどをポケットに入れておく等方法もあるが、お店の側にも入居者の行為をそれとなく話し、理解してもらった上で、見守ってもらい、できるだけ商品に関してトラブルを起こさないことが必要である。この意味でEさんの場合はグループホームと「地域」の関係を守ったことにもなるのである。この事例は前述したとおり、更にスタッフ間のディスカッションで深められ、その場であんぱんを食べるという行為自体を受け入れることも必要なのではないかと主張するスタッフもおり、そのためにはその行為を蔑視しない地域の理解が必要であるという。目指すべき「地域理解」は同じであっても、方法論は相反することから、いかにチームでの共有化が大切かを認識させられた。

認知症高齢者に必要な関わりは、“その人を理解することから始まる”ことが研究結果から導き出されたわけであるが、前述した積極的な関わり意図の内観的な要素が強いため、①第三者には分かりにくい、②自らの意味づけを場合によっては過大に評価する場面があることが課題としてあげられる。

例えば、居住している入居者の中に、水戸黄門をテレビで見ることを大変楽しみにしている方がいたとする。リビングでは、楽しそうにテレビに見入っている。傍らには介護スタッフが業務日誌をつけながら、時折その入居者に話しかける。二人のやりとりは楽しそうである。もし、上記の場面を一枚の写真に撮り“リビングで水戸黄門を見ている祖母と孫”というキャプションをつけたとする。この写真を見て、一緒にいる若者が老婆に対して何らかのケアを行っていると考え人はほとんどいないと思われる。しかし、本当はグループホームのリビングで、

テレビを見ている入所者とその側で業務日誌をつけている介護者の写真であることがわかれば、介護者が入居者の様子を伺いながら事務処理をしているところなのだと想像する場合もあるかもしれない。この場合、入居者の様子を伺うということは、認知症高齢者の身体の安全確保を行うことであり、わざわざ入居者の側で、話しかけながら日誌をつけるということは、行動を共にする意図があることが伺われ、その結果、水戸黄門のおかげでただでさえ機嫌が良い入居者の気分をますます良くする、言い換えれば、水戸黄門を通じて介護者と入居者の関係をより緊密にするということなのである。その意味で、水戸黄門を見ている入居者を見守るのも認知症高齢者への大切なケア行為であると言える。

しかし、根本的な問題として、一般的に、労働を投下しているとは思えない支援行為に対し、当該行為が認知症高齢者の関わり(ケア)にとって必要であるというコンセンサスをまだ我々は得ていないという問題がある。第三者に納得してもらうためにはその側にいることの成果を示さなければ、介護スタッフの意識だけが先行していると捉えられかねない。また、介護者の意図の意味づけを客観的視点なしに気持ちだけが先行してしまい、結果的に独りよがりであってはならないのである。そして、入居者の側にいるという行為を良しとするチェックリストが仮にできたとする、側にはいるが肝心の気持ちが入居者と離れていけば、形骸化し全く意味をなさなくなってしまう恐れがある。以上のことは、関わりの意図を意味づけする際の課題と考えられる。

E. まとめ

前年度の調査では、グループホーム及びユニット型特養での支援行為(関わり)は、生活支援重視型である傾向がみられており、また、行動上の問題への対応も極めて少ないことが特徴的である結果が導き出されていた。

それを裏付けるように、本分担研究では、介護スタッフの関わりの成果として認知症高齢者の感情反応を調査したところ、7割強がPositiveな反応であったことから、穏やかに、意欲的に暮らしていることが理解された。Positiveな感情反応を示す割合が高い背景には、一人ひとりの入居者の行動をはじめとし、健康状態、認知症症状、生活歴、性格傾向、その人を取り囲む社会等を全体的に洞察、観察し、そしてその人の人となりまでも理解していることがスタッフ・インタビュー及びカンファレンスのデータから顕在化された。

その人間理解に基づき、支援行為の目的である「意図」を4事例から分類した結果、安全性・生命維持のための関わり、関係性を重視する関わり、自己実現のための関わりの3つのカテゴリーが抽出された。一見何気ない行動に見えるスタッフの関わりであっても、スタッフらが意識的に自分たちの行動の意味を意識化し、さらに言語化することにより、身体介護などの顕在化されやすい介護支援行為と同様に、認知されていくことと考える。特に、精神的介護が大きなウェイトを占める認知症ケアにおいては、ブラックボックスとなり第三者には分かりにくい部分であったため、意図が言語化されることにより、支援行為の判断過程が明確化される意義は大きいと考える。

しかし、認知症高齢者を知り、理解するという事は難しいプロセスであり、一定期間の時間も要する。客観的に判断できることは別として、本人の深いレベルまで理解していないと、支援行為の目的である「意図」が見出せない場合がある。例えば、昼夜逆転の生活リズムの人に対しては、昼に起きてもらうように生活を組み立てるということが多くの施設では行われている。中にはテレビに興味を示さない人に対しても寝せないようにテレビの前に座らせている光景が見受けられる施設もある。入居者は明らかに Negative 反応で苦痛、不満、退屈の言動を示す。うわべだけのケア、誰にでも共通する技術でその症状を押さえ込もうとしても根本的な解決にはならない。その人の事情に配慮されたケアが大切なことから、関係性を重視した関わり、自己実現への関わりの意図を介護スタッフが瞬時に想像・創造することが大切である。その結果として、積極的介護支援(関わり)が自然発生すると考えられる。このことは4事例と少ない事例ではあったが、スタッフのインタビューから得られた貴重な事実に基づく結論である。仮に、相手の意を汲み取れる介護者が望ましい支援者であるとするならば、支援行為(関わり)を具体的に伝える際は、buddy system のように、入居者を理解している熟練度の高い先輩スタッフと新人スタッフが2人1組となって関わるシステムが有効ではないかと考えられた。

また、グループ・ディスカッションからは、認知症高齢者を理解するための視点を共通認識する必要性、また介護スタッフの持っている倫理観、価値観等の違いが介護アプローチに影響を与えていることが明らかになったことにより、介護スタッフがチームで支援行為の方向性を議論することの大切さが理解された。

今後の課題としては、本研究から明らかになった内容をもとに、より多くの介護スタッフを対象にして量的に検討していく必要性があげられた。

F. 参考文献

- 1) 特定非営利活動法人シルバー総合研究所：痴呆介護へのパーソンセンタードケアの導入と普及に関する調査研究事業
- 2) Kidwood, T. & Bredin, K.A. A new approach to the evaluation of dementia care. *Journal of Advances in Health and Nursing Care*, 1, 41-60 (1992)
- 3) 中澤明美、長田久雄：中年女性の加齢に伴う「獲得」に関する語りの分析. ヒューマン・ケア研究. Vol. 8 (2007)
- 4) グループもえぎ：スタッフを計画的に育成するために. りんくる Vol. 18 (2008)
- 5) Richard F.: BEYOND WORDS Emotional Response as Quality Indication in Dementia Care. DSDC (2000)
- 6) 斉藤勇 編著：感情と人間関係の心理. 川島書店、(1997)

(表5-1) 入居者の状況

	事例1 (E氏)	事例2 (F氏)	事例3 (G氏)	事例4 (H氏)
入居場所	GH	ユニット	GH	ユニット
性別	F	F	F	F
年齢(歳)	90	81	84	96
現疾患	VD	AD	AD	AD
要介護度	4	1	4	3
認知症自立度	IV	II	III	IV
HDS-R(点)	0	17	0	2
寝たきり度	A	J	A	A
Berthel Index(点)	35	85	65	40
認知症になってから の期間(年)	12	8	8	8
入居期間	11年3月	2年8月	3年6月	2年10月

(表5-2) 介護スタッフの状況

No.	所属	年齢	勤務年数	認知症経験	学歴	資格
1	GH	33	3年	8年2月	大卒	社会福祉士 介護支援専門員
2	GH	27	9年3月	9年3月	高卒	介護福祉士
3	GH	27	2年11月	2年11月	高卒	ヘルパー2級
4	GH	25	2年11月	2年11月	大卒	社会福祉主事
5	GH	61	8年2月	8年2月	高卒	ヘルパー2級
6	GH	23	1年	1年	大卒	介護福祉士 社会福祉主事
7	GH	24	2年11月	2年11月	専門学校卒	介護福祉士
8	ユニット	40	8年	8年	高卒	介護福祉士 介護支援専門員
9	ユニット	23	2年11月	2年11月	専門学校卒	介護福祉士
10	ユニット	43	1年9月	3年11月	高卒	ヘルパー2級
11	ユニット	35	2年4月	2年4月	高卒	無
12	ユニット	33	3年	3年	高卒	ヘルパー2級
13	ユニット	21	11月	11月	専門学校卒	介護福祉士
14	ユニット	34	2年11月	2年11月	大卒	社会福祉主事

(表5-3) 認知症高齢者の感情反応のカテゴリー

ERIC改訂版 (2002, Uchide)

Positive 反応

1. 喜び (Pleasure)

笑い、微笑み。目を細め、喜んで同意する。喜んで両手を差し出す。

2. 嬉しさ、親しみ・愛情 (Glad, Warmth and Affection)

他の人に感情的なサポートを見せる。近寄ってくると愛情をもってあたたかく接する。

3. 意欲、チャレンジ、自発的援助 (Spontaneous Helpfulness)

要求されなくても自発的に他者の役にたつような援助を行おうとする。

4. 創造性・表現性 (Creativity and Expressiveness)

要求されなくても自分自身で踊りや歌、絵画などの制作活動に参加する。

5. 満足・安心 (Contentment)

快適な格好で座ったり、横になったりする。手足や首には何の緊張感も見られない。動作がゆっくりで緊張感もなく、くつろいでいる。

Negative 反応

6. 怒り (Anger)

歯をくいしばる。しかめっ面をする。悪態をつく。押ししたり、脅かしたりし、攻撃的な態度をとる。

7. 不安、恐れ (Anxiety or Fear)

同じ行動を繰り返し、動揺をみせる。ため息をつく。顔にしわを寄せる。震え、顔の筋肉がこわばる。手を握り締め、足を小刻みに動かし、目を大きく見開いている。

8. 不満、苦痛 (Physical Discomfort or Pain)

身体の一部をこすったり、つかんだりする。うめいたり、顔をしかめたりする。

9. 悲しみ (Sadness)

叫び、うめき、泣く。意気消沈する。目や頭を伏せる。無表情で涙をぬぐう。

10. 嫌悪

いらだった気持ちになり、ムシズが走り、鳥肌が立ったりする。

11. 退屈

Neutral 反応

12. 気恥ずかしさ、はじらい (Shy)

13. 戸惑い、躊躇い (Hesitation, Perplex)

14. 驚き (Surprise)

その他の反応

15. 無感情 (Nothing)

16. 考えている (Thinking)

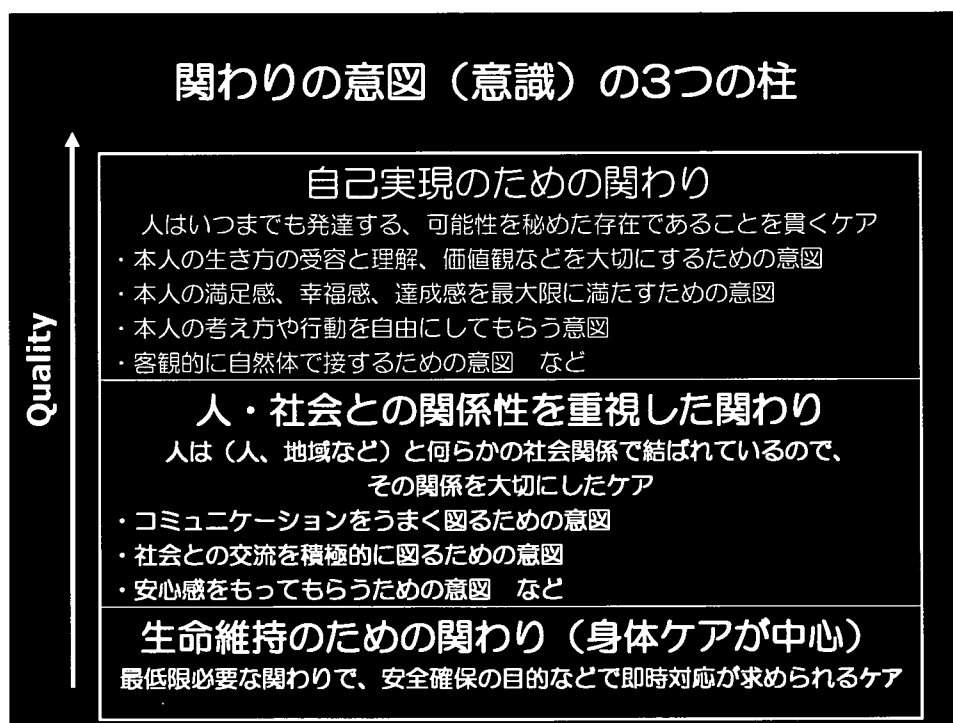
17. その他 (Other)

(表5-4) 認知症高齢者へのスタッフの関わりの意図のカテゴリー
(2008年、Uchide)

大項目	中項目	一致度(%)
1. 生命維持・安全のための関わり	①身体面への配慮	100.0
	②精神面、特に BPSD への配慮	75.0
	③安全面への配慮	100.0
2. 人と社会との関係性を重視した関わり	①なじみの人間関係を大切にし、本人と行動を共にするための意図	76.0
	②本人のペース(心の動きや会話)に合わせるための意図	78.0
	③コミュニケーションをうまくするための意図	91.3
	④混乱させないための意図	100.0
	⑤社会との交流を積極的に図るための意図	66.7
	⑥共感するための意図	66.7
	⑦安心感をもってもらうための意図	66.7
	⑧気分を良くするための意図	100.0
3. 自己実現のための関わり	①本人の生き方の受容と理解、価値観を大切にするための意図	80.0
	②自尊心を高め、自信をもってもらうための意図	91.3
	③本人の生活感を大切にするための意図	75.0
	④絶えずプラスの働きかけにより、可能性を引き出すための意図	80.0
	⑤本人の満足感、幸福感、達成感を最大限に満たすための意図	81.8
	⑥過去を大切にするための意図	100.0
	⑦創造性をかきたてるような意図	100.0
	⑧ユーモアをもって、一緒に楽しむための意図	100.0
	⑨自己実現してもらうための意図	100.0
	⑩本人の意欲を大切にする意図	86.0
	⑪本人の考え方や行動を自由にしてもらう意図	100.0
	⑫客観的に自然体でみるための意図	95.8
4. その他		80.0

(表 5 - 5) 入居者感情反応の結果

	Positive	Negative	Neutral	Others	全体
事例 1(E 氏)	32.5(75.6%)	6.0(14.0%)	1.0(2.3%)	3.5(8.1%)	43.0(100%)
事例 2(F 氏)	27.5(72.4%)	2.5(6.6%)	4(10.5%)	4.0(10.5%)	38.0(100%)
事例 3(G 氏)	30.5(67.8%)	4.0(8.9%)	5.5(12.2%)	5.0(11.1%)	45.0(100%)
事例 4(H 氏)	32.0(72.7%)	4.0(9.1%)	1.5(3.4%)	6.5(14.8%)	44.0(100%)
全体	122.5(72.0%)	16.5(9.7%)	12.0(7.1%)	19.0(11.2%)	170(100%)



(図 5 - 1) 関わりの意図とその質との関係

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表
現在のところなし（準備中）

平成19年度 厚生労働科学研究費補助金
長寿科学総合研究事業報告書

認知症における標準的なケアモデルの構築に関する研究

2008年4月発行

発行者 認知症介護研究・研修仙台センター
センター長 加藤 伸司
制作 株式会社 ホクトコーポレーション
仙台市青葉区上愛子字堀切1-13
TEL (022) 391-5661 (代)
